異文化言い分EVEN

Saygnasak SENG ARLOUN
出 身 地：ラオス
海外短期訪問研究、recent master student in National Graduate Institute for Policy Studies.
所　　属：A researcher in National Economic Research Institute, Ministry of Planning and Investment, Lao PDR.
日本滞在：2008年４月～2010年２月

日本での生活

サンヤサク・セン・アールン

日本滞在は今回で三回目、アジア経済研究所への訪問は二回目である。日本の社会や環境にもだんだん親しみがもてるようになった。しかし、前回までは、コーディネーターなどの方々以外は、あまり日本の人々との交流がなかったため、慣れ親しむというところまでいかなかった。滞在中、私と色々な国からやってきた友人たちは、日本で暮らすための基本的な日本語の言い回しを数日間で覚えた。もちろんこの授業は役に立ち、暗記したりお互い会話したりしたことは楽しかった。もちろん、実生活において直ちにそれらを応用できるわけではない。

前回から今回の来日まで、光陰矢の如し。今回は二年間の滞在だ。JICAの東京インターナショナルセンター（TIC）にいた最初の三カ月は満足のいくものだった。他の研修生とは英語で意思疎通ができたからだ。だが、日本での生活でもっと経験を積もうと思い立ち、TICを出る決心をした。

最初にラオス人の友人についてお話しよう。彼は中国語が上手なので日本には職を見つけにきたのだが、日本でよい職に就くには日本語を習わないとだめだ、という。数日間の日本語講習を受けたら、彼は「こんにちわ」「さようなら」などの基本の語句を口にできるようになった。ある日、彼はクラスから家に向かう電車に乗っていた。電車が最寄り駅に着いたので彼は電車を降りた。運悪く、カバンを車内に置き忘れたことに気づいた。急いで駅員のところに行き、状況を説明しようとした。が、どう駅員さんに話したらいいかわからない。彼は授業で習ったいくつかの言葉や文を用いて、またそれらを組み合わせたりして必死に説明を試みた。そもそも「かばん」という単語を知らなかったため、彼は駅員に「コレハナンデスカ?」と行き過ぎる乗客が持っている鞄を指して言った。「かばんです」との答えが返り、「かばん」という単語と発音を知る。そのあと、友人は覚えた限りの言葉を駆使して自分が車中に鞄を忘れたことを伝えようと努力したが、駅員さんは何を言われているのか理解できなかった。そこで、友は電車を指差し、「カバン　サヨウナラ」と言った。駅員さんは理解した。そして友は自分の住所をメモして駅員に渡した。数日後カバンは自分の家に無事戻った。

私自身の体験をお話しよう。もう日本に一年と六カ月以上滞在している。日本の友人と外出する機会が時々ある。ある日、日本料理店に入った。店の人は、私が日本語を話せないことを知ってからというもの、何も言わなくても料理を準備してくれた。私はただ座って、食べるだけだった。その後、友人と連れ立ってそこに頻繁に通うようになった。行くたびにお店は、至れり尽くせりしてくれた。これだともう日本語は習う必要はないな、と思うようになった。でも店に行くたびに観察は続けた。その結果ウェイターは客が入ってくると、毎回同じ質問をしていることに気付く。日本人の友人曰く、最初の質問は「お客様は何人ですか?」であり、二番目の質問は「喫煙席、禁煙席のどちらがよろしいですか?」とのこと。ある時、日本語ができない友人と私だけで和食レストランに行った。店に入ると店員は何か私たちに質問をしてくるが、当然理解できない。それでも私は対処方法を知っている。まず二本の指を上げれば、二名で来ていることを伝えることができる。次に、「いいえ」と言えば、禁煙席に連れて行ってもらえるのである。案の定、推測は正しく、まさか店員さんは私たちが日本語を全く理解できていないとは思っていない。注文を取りに来るまでは……。

日本でのもうひとつの経験を話そう。私が級友と連れだって横浜に住む日本人の友人宅を訪ねたときのことだ。横浜はとてもモダンな街で彼の住まいも我々が見たこともないようなハイテク装置完備の現代的マンションだった。そこで食べたり、飲んだり、談笑したりして、楽しいときを過ごしていた。一緒に来ていた級友がトイレに立った。数分後ビル警備室から部屋に電話が入り「何が起こりましたか?」と聞かれた。とくに変わったこともなかったので我々はなぜ警備室から電話がかかってきたのか全く分からなかった。しかし、友人がトイレにいることに気ついた。日本人の友人がトイレの扉越しに「どうしたんだ」と声をかけた。彼は水を止めたいのだが、ボタンがたくさんあり、みんな日本語で書いてあるのでどれを押したらいいのかわからない、との答え。そしてついに彼は緊急警報ボタンを押してしまったのだ。これが電話の理由だ。家を出てからの帰り道、我々外国人は、日本の家でトイレは使うものではないという結論に至った。

実際、われわれは周囲のものごとから多くの経験をつむことができる。しかし、どうそれを受け止めるかが肝心。ふり返ってこのようなお話が日本でのよき経験となっていくのだろうと思う。

（海外短期訪問研究者）